

Ulrich Im Hof, *The Enlightenment*.

Blackwell, 1997, x+310pp.

森 村 敏 己 (一橋大学)

本書はジャック・ル・ゴフを監修者とするシリーズ、“Making of Europe”の一冊である。当初はドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語で出版され、一年遅れて英語に翻訳された。著者の専攻はスイス史であるが、何の形容詞句も付かないタイトルに相応しく、実に多彩なテーマが北欧から南欧に至るヨーロッパ全体、さらには新大陸までも視野に入れながら論じられており、五カ国語で出版されるに十分な内容を備えている。

全体は九つのパートに分かれ、39の章から構成されている。限られた紙数ではすべての章を紹介することは到底できないが、啓蒙思想を「闇を追い払う光」のイメージで捉えた18世紀当時の言説の確認に始まり、社会構造、国家の在り方、啓蒙運動を支え、普及させた組織、思想内容、啓蒙への反動、革命、19世紀への展望といったテーマが次々と論じられている。もちろん、ひとつの章が10ページにも満たないという構成上、それぞれのテーマに関して詳細な分析を望むのは無理である。おそらく個々の分野を専攻している研究者は物足りなさを感じるであろう。たとえば評者が専攻しているフランスに関していえば18世紀における「非キリスト教化」や「王の非神聖化」といった重要な議論がほとんど扱われていないし、「政治的・社会的解放」と題された章で示される議論、つまり経済的に台頭してきたブルジョワジーが、それまでアリстокラートが独占してきた政治的権利への参加を求めようになったという説明などは単純に過ぎるであろう。また、啓蒙思想の実践的性格を強調し、社会的効用を当時の哲学の主要な

目的と見る立場のせい、18世紀において極めて大きなテーマであった感覚論にはまったく触れられていない。しかし、著者がもっとも得意とするスイスはいかに及ばず、デンマークやスウェーデンあるいはスペインにおける啓蒙運動の描写はわれわれにとって新鮮であり、またカトリックとプロテスタントの違いを初めとする国情の多様性に由来する啓蒙運動の性格の変化にも配慮が行き届いている。たとえば漸進的な改革を望むことが一般的だった啓蒙運動の中で、それに飽き足らず急進的な変化を求めたドイツの秘密結社 Illuminati の活動と弾圧の描写などは評者にとって興味深いものであった。あるいは啓蒙思想のコスモポリタ的な性格は当時盛んに強調されたパトリオティズムといかに共存しえたかという問題を扱いながら著者は、国民国家という概念の不在を鍵に、18世紀は祖国への貢献がそのまま人類への貢献に結びつくと考えたことのできた時代であったとしているが、こうした説明は19世紀のナショナリズムを健全な祖国愛の濫用、変質と見る視点につながっており、そこにはスイス生まれの著者が抱く国民国家への批判的姿勢を読み取ることもできよう。

「闇を追い払う光」のイメージから出発し、自分より家族を、家族より国を、国よりヨーロッパを、ヨーロッパより人類全体を重んじるとしたモンテスキューの有名な台詞で終わる本書は、全体として明るい色調で彩られている。もちろん、著者は抵抗の根強さ、反動の動き、啓蒙思想自体のユートピア的性格も指摘しているが、権威におもねることなく、すべてを自由な検証の対象とし、人類全体の幸福を目的としたとされる啓蒙運動への評価は極めて高い。プレ・ロマン主義の分析を通じて反理性的な傾向の存在に触れながらも、この時代を基本的には「理性の時代」と見る態度も本書が持つ明るさの原因のひとつであろう。今日から見れば過度に感傷的なルソーの小説がベストセラーであったことや、当時の道徳哲学における情念の重要性を思えば、啓蒙時代を単に「理性の時代」と定義することには抵抗を覚える。しかし、矛盾しあう多様な要素をできるだけ公正に扱おうとする著者の配慮は十分に感じられる。啓蒙思想研究の入門書としては恰好のテキストであろうし、18世紀の専門家であっても、ヨーロッパ全体に及ぶ著者の博学からは得るところが大きいであろう。

ただ、こうした観点からすれば文献案内を著者名のアルファベット順に並べたことは惜しまれる。これだけ多くの国に関して多様なテーマを論じている以上、章毎に主要な文献を列挙してくれたほうが読者にとってはありがたい。それぞれの章には最小限の引用注しか付されていないだけになおさらである。

追記：本作品は1998年3月、平凡社より『啓蒙のヨーロッパ』とのタイトルで日本語訳が出版された。